

青年期・成人期の余暇と発達

## 特集

## 知的障害者の余暇をめぐる状況と論点

丸山 啓史

## 要旨

知的障害者の余暇に関しては、余暇活動の幅の狭さが指摘されてきた。テレビを観たり、音楽を聴いたり、ゲームをしたりして余暇を過ごす人が多い。余暇についての家族依存も問題である。最近ではガイドヘルプの活用もみられるが、余暇のさらなる充実について考えていく必要がある。そのために重要になるのは、余暇活動の質に目を向けることである。余暇活動に参加する本人の思いに着目することが求められるし、消費と深く結びついた余暇への批判的視点をもつことも必要である。また、障害の程度にも関心を払いながら、余暇活動の拠点を確立していくことが大切になる。

キーワード 知的障害者、余暇、余暇活動の質

## はじめに

人間の生活を「日中活動（労働など）」「居住」「余暇」といった3領域に区分し、それぞれの充実を必要なこととする見方は、現代社会において広く受け入れられるものになっている。しかし、障害者の生活に関する議論は、「日中活動」や「居住」に集中しやすい。たとえば、2011年に障がい者制度改革推進会議総合福祉部会がまとめた「骨格提言」をみても、「就労支援」「日中活動支援」「居住支援」「施設入所支援」「個別生活支援」などについて提言がなされているのに対し、余暇への関心は希薄である<sup>1)</sup>。また、実際の状況を見ても、「余暇」のための制度的基盤や社会資源は、「日中活動」や「居住」と比べても貧弱だといえる。

一方で、障害者権利条約の第30条においては、「文化的な生活、レクリエーション、余暇及びス

ポーツへの参加」についての規定がなされており、「障害者が他の者との平等を基礎として文化的な生活に参加する権利」のために締約国がとるべき措置が示されている。豊かな余暇をもつことは、障害者の権利として重視されなければならない。

そうした認識のもと、本稿では、障害者の青年期・成人期の余暇について考える。ただし、障害種別によって余暇をめぐる状況や課題は相対的に異なると考えられるため、ここでは知的障害者の余暇に焦点を当てる。前半では知的障害者の余暇をめぐる実態や動向を概観し、後半では余暇の充実のために検討されるべき論点について述べる。

## 1 余暇をめぐる状況

## (1) 余暇の内容

知的障害者の余暇に関しては、30年以上前に、渡辺（1983）が「精神薄弱養護学校」の高等部生と卒業生を対象とする実態調査を実施している。そこから把握されたのは、「余暇行動」としては「テレビ、レコード・ラジオ、家族との団らんが

群を抜いて多い」（p.134）ということであった。調査結果については、一般の小学生・中学生との間で「テレビ視聴時間の比較」もなされ、「精神遅滞者がいかにテレビづけになっているか」（p.134）が示されている。そして、渡辺は、「テレビ視聴と家族との雑談を除くと、もう何も残らない余暇の過ごし方は、あまりに貧弱であり、何らかの援助の手がさしのべられてしかるべきであろう」（p.135）と、余暇に関する支援の拡充を主張している。

しかし、全日本手をつなぐ育成会のもとで2000年代前半に実施された実態調査においても（小林・川原，2004），知的障害者の余暇については「テレビ・ビデオの視聴やパソコン・ゲームが余暇時間の多くを占めている」（p.12）ということが把握されている。そして、武蔵・水内（2009a）は、富山県の特別支援学校高等部の卒業生を対象に実施した調査から、「知的障害者の地域参加と余暇活用」に関して「地域で利用できる資源が限られ、定期的な活動に参加していない者が多かった」（p.60）と述べており、武蔵・水内（2009b）は、同調査から、「ふだん家で一人ですること」としては「テレビ」「ビデオ・DVD」「CD・音楽鑑賞」「ごろ寝」などが多いことを示している。また、郷間・藤川・所（2007）が通所授産施設で働く知的障害者を対象に実施した調査についてみると、休日には「半数以上が自宅の外に出かけていた」とされるものの、「自宅にいる場合はテレビやビデオ、音楽、ゲーム、寝転んでいたり、ごろごろしている場合が多かった」とされている（p.69）。

知的障害者の余暇については、本人または家族の多くが「充実している」と回答しているという調査結果もみられるものの（小林・川原，2004），活動内容の幅（選択肢）の拡充などが課題として指摘されてきたといえる。

## (2) 障害の程度と余暇の実態

知的障害者の余暇の実態を把握するうえで、知的障害の程度に関心を払うことも必要である

う。障害の程度によって、余暇をめぐる実態や課題が相対的に異なることが想定されるからである（丸山，2004）。

この点について、小林・川原（2004）による調査報告をみると、平日の仕事の後は「障害の程度が比較的重いほどまっすぐ家に帰るケースが多い」（p.14）ということや、余暇を「過ごす相手」については「比較的重度の人ほど家族以外の選択肢を選ぶ機会がない」（p.17）ということが推定されており、「中度から重度の障害のある人への対応が大きな課題である」（p.20）とされている。

一方で、郷間・藤川・所（2007）の調査によれば、休日に外出する割合は「軽度・中等度群」と「重度・最重度群」とで大きな差はない。そして、「地域での友人」がいるという回答は、「軽度・中等度群」で22.6%であるのに対し、「重度・最重度群」で57.9%となっている。知的障害の重い人のほうが余暇についての困難や課題が大きいとは限らないことがうかがえる。

奥住・国分・北島（2011）は、知的障害特別支援学校5校を通して、「高等部普通科に在籍する生徒のうち、文字を読むことができ、調査内容をよく理解して協力が得られた者」を対象として、余暇活動に関する質問紙調査を行い、「現在頻繁に行なっている余暇活動について回答が多かった項目は、テレビ視聴、ゲーム、漫画・雑誌の読書であった」（p.169）と述べている。また、今井（2011）は、グループホームにおける余暇支援のあり方に問題意識を置きながら、軽度知的障害者を対象とする聴き取り調査を行い、「余暇の現状としては、1人で過ごす余暇が多く、寝る、買い物、TVやゲーム、パチンコなどが多い」（p.52）と述べている。知的障害が相対的に軽いと考えられる人が必ずしも幅広い余暇活動を経験しているわけではない。

丸山（2011a）は、知的障害の軽い子どもの放課後・休日をめぐる問題に関わって、「知的障害の軽い子どもが有効に活用できる社会資源は限られる傾向がある」と指摘し、「知的障害が軽いことは、放課後・休日の充実に関する困難が少ない